

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02668

研究課題名（和文）読むことの「深い学び」を促す学習評価法開発に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A Basic Research on Developing Learning Assessment Strategies for fostering "Profound Learning" of Reading Comprehension

研究代表者

山元 隆春 (Yamamoto, Takaharu)

広島大学・人間社会科学研究科（教）・教授

研究者番号：90210533

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、主に現代米国の最新の研究にもとづいて、読むことの授業で「深い学び」を誘う「学習評価」として、次の4つの知見を得た。(1)理解方略をつかって「精読」するための「道標」を文章中に探らせる。(2)テストなどの総括評価だけに限定せず、「一冊まるごとの評価」などを試み、学習者の読む過程に注目した評価法を工夫する。(3)教科書教材等の共通教材の学びと、学習者自身が選択した自分で読みたい文章の学びとを「ブレンド」する授業をつくる。(4)読むことの授業で「対話的論証」を行い、議論の仕方を明瞭なものにしたり、教師から生徒、生徒同士のフィードバックができるようにすることで、深い思考を促す。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、生徒の読む行為のなかで何がおこなわれているのかということを見取る枠組みを、読者反応の多角的な研究にもとづいた米国における理解方略研究・読むことの学習評価研究の成果に学びながら、日本語文章（主に文学作品）に対する積極的な読む行為を生み出す、それ自体が指導となるような学習評価のための理論的知見を得たところにある。読みの授業で「指導と評価の一体化」を可能にする知見を示した。読むことの学習評価は読者の読む行為を理解し、解釈することである。本研究で明らかにした知見は、児童・生徒に限らず、自他の読む行為を見つめ直す読むコミュニティをつくり、読む文化を築くという社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this study, we obtained the following four findings as "learning assessment" that invites "deep learning" in reading classes, mainly based on the latest research in the United States.

(1) Have students search for "signposts" for "reading carefully" using understanding strategies.(2) Not limited to the overall evaluation such as tests, try "whole book assessment" and devise an evaluation method focusing on the reading process of the learner.(3) Create "blended lessons" the learning of common teaching materials such as textbook teaching materials with the learning of sentences that the learner chooses and wants to read.(4) Encourage deep thinking by giving "interactive argument" in the reading class to clarify the way of discussion and to give feedback from teachers to students and students.

研究分野：国語教育学

キーワード：読むこと 学習評価 指導のための評価 読むコミュニティ 読む文化 読者反応 文学作品

## 1. 研究開始当初の背景

国語科教育研究においては、読者反応理論や認知心理学の知見を生かしながら子どもの「理解方略(comprehension strategies)」を理論的・実証に解明する研究が進められ、読者反応に基づいた読むことの深い学びを追求してきた。心理学における「メタ認知」の研究を踏まえたかたちで始まった、読むことの「理解方略」の研究は、山元隆春(1994)が明らかにしたような特徴を持つが、1990年代以降の国語教育学において少なからぬ蓄積を見せている。

間瀬茂夫(2013)は、八田幸恵(2010)などをもとに、2000年以降には読むことの状況や文脈のなかで使用者がどのように「理解方略」を行使して理解行為を行うのかということの解明を目指す理論的提案や実践が行われたことを明らかにしている。また、エリン・キーン(山元・吉田訳、2014)は、児童生徒の「深い認識」に「意味づける」「関連づける」「優れた読み手・書き手となる」という三つの領域があるとし、それらの領域の学習を通して身につけられた理解方略(「理解のための方法」(comprehension strategies))が、児童生徒の人生においてさまざまな成果(outcomes)をどのようにもたらすかということを見極める重要性を指摘した。

一方で、「話し合い」が理解に及ぼす影響と成果の解明も行われてきている。応募者も関わった位藤編(2014)では、文学作品や説明的文章の読みに関する「話し合い」によって興味関心をもつことのできる対象についてなされた場合に言葉によるコミュニケーション力が高まる一方、その「話し合い」を通じて読みの対象についての理解力・解釈力が向上することが明らかになった。と、同様の指摘は話し言葉教育研究領域で「話し合い」の力を高める上でその素材としての文学作品や絵本の重要性を指摘した山元悦子(2016)や、読むことの学習における「話し合い」がリテラシー形成に果たす重要性を指摘した山元隆春(2014)、寺田守(2012)、吉田新一郎(2010)でもなされている。

また、アメリカ合衆国の小学校で読むことの授業での「話し合い」で「リアルなトーク」を成立させる重要性を主張した Boyd & Galda(2011)や、読むことの授業での「話し合い」を効果的に進め、理解力形成の足場にするリテラチャー・サークル実践を記述し、分析したジェニ・デイら(山元訳、2013)の研究においても、理解に及ぼす「話し合い」の影響・効果が指摘されている。しかしながら、とくにその成果について質的に分析し、「深い理解」を導く学習評価法を解明しようとしたものは少ない。間瀬(2013)、松友一雄(2013)が指摘するように「評価と結びついた理解方略の研究」も未だに少ないのが現状である。リーディング・ワークショップの実践を収めたプロジェクト・ワークショップ編(2014)やリテラチャー・サークルの実践書であるジェニ・デイら(2013)には「評価」については若干の実践的提言こそあるが、実証的な研究の開拓はこれからの課題であると言える。

## 2. 研究の目的

「1」で述べたような学術的背景を踏まえると本研究課題の核心をなす問いは以下のようなものとなる。

(1) 作品や文章のどのような要素に目を向けていけば「深い学び」がいざなわれるのか。

(2) 授業者が、児童生徒の読者反応をどのように捉えて、授業でいかしていけば、「深い学び」を実現することができるのか。

(3) 授業における読者反応の見取り方をどのように工夫すれば、読むことの学習を通して、学習者の文章への積極的関与と「深い学び」を促すことになるのか。

(4) どのような学習評価を継続して行えば、読むことの学びは深まっていくのか。その深まりをどのように見極めていくことができるか。

本研究は、読者反応理論や認知心理学のその後の展開を踏まえながらこれらの問いを探究し、国語科において読むことの「深い学び」を促す学習評価法の開発を目指すものである。

読者反応に着目した読むことの教育の研究については一定の蓄積がなされているが、それを学習者の理解力の評価法としてどのようにいかしていくかということについては、いまだに十分解明されておらず、そのことに着目し、その意義の解明を目指しているところに本研究の独創的な点がある。すなわち、先行研究では未だ十分に果たされてはいないと言われていた「評価と結びついた理解方略の研究」を、文章に対する学習者の書き言葉・話し言葉による反応の分析に基づいて推進している点も学術的に大きな特色である。このような研究を通して、読むことの学習における理解力育成の筋道が明らかになり、授業において学習者が獲得した理解方略とその成果の見極めや見取りの困難さを解消する方法を見出すことができる。そのことによって、学習者の学習成果を教師が見通しやすくなるとともに、何ができれば理解できたということになるのかということや学習者にわかりやすく伝えることができるようになり、児童生徒の理解力向上の重要な手がかりが得られる可能性をもつことになる。

本研究では、次のようなことの解明を目指す。

- ①読むことの学習における「深い学び」とはどのような学びかということ、作品や文章に対する読者反応の量的・質的分析を通して明らかにする。
- ② ①の分析をもとにして、作品や文章に対する学習者の積極的な関与を導く指導法を明らかにする。
- ③ ②を踏まえて、理解行為のもたらす成果をどのように評価していけば(価値づけ、意味づけていけば)、作品や文章に対する学習者の積極的な関与が導かれるのかということ、明らかにし、読むことの「深い学び」をいざなう学習評価(読者反応の見取り方)の条件を解明する。

### 3. 研究の方法

学習者の理解力・読解力の解明に関しては、我が国の国語教育学・心理学・読書学における「理解方略」研究において研究の蓄積が行われ、その展開においても、本研究が扱おうとする「評価と結びついた理解方略の研究」は重要な研究課題となっている。米国においては、エリン・キーンらによるリーディング・ワークショップの実践研究・評価研究やキャロル・トムリンソンらによる一人ひとりをおかす教育(Differentiated Instruction)の評価研究(トムリンソンとムーン(山元・山崎・吉田訳, 2018)などは、この研究課題において先進的である。本研究はこれら内外の研究を踏まえつつ「評価と結びついた理解方略の研究」に取り組み、読むことの「深い学び」を促す学習評価法の開発を目指そうとするものである。

### 4. 研究成果

本研究では、主に現代米国の最新の研究にもとづいて、読むことの授業で「深い学び」を誘う「学習評価」として、多くの知見を得ることができた。「2」に示した研究の核心となる問いに即して示すと次のようなものとなる。

- (1) 理解方略をつかって「精読」するための「道標」を文章中に探らせる。
- (2) テストなどの総括評価だけに限定せず、「一冊まるごとの評価」などを試み、学習者の読む過程に注目した評価法を工夫する。
- (3) 教科書教材等の共通教材の学びと、学習者自身が選択した自分で読みたい文章の学びとを「ブレンド」する授業をつくる。
- (4) 読むことの授業で「対話的論証」を行い、議論の仕方を明瞭なものにしたり、教師から生徒、生徒同士のフィードバックができるようにすることで、深い思考を促す。

これらの知見は、2018年度から2020年度にかけての3年間の研究のなかで生まれた次のような研究成果にもとづいている。

#### 2018年度

- ・キャロル・アン・トムリンソン、トンヤ・ムーン著(山元隆春・山崎敬人・吉田新一郎訳)『一人ひとりをいかに評価』、北大路書房、pp.1-228、2018年10月。
- ・山元隆春、第6章『これからの文学創作の学習指導(展望)』、武藤清吾編・浜本純逸監修『中学校・高等学校 文学創作の学習指導—実践史をふまえて』、溪水社、2018年12月。
- ・山元隆春、第V章『アメリカにおける「物語」創作—「ものの見方・考え方」を育てる内省と対話』浜本純逸・三藤恭弘・塚田泰彦・青木伸生・尾崎夏季・成田雅樹・佐藤明宏・山本茂喜・松崎正治・住田勝・山元隆春(著)、浜本純逸(監修)、三藤恭弘(編集)『小学校「物語づくり」学習の指導—実践史をふまえて』、pp.169-186、溪水社、2019年2月。
- ・山元隆春、第3章第2節『文学国語』大滝一登(編)『高校国語 新学習指導要領をふまえた授業づくり 実践編：資質・能力を育成する事例』、pp.30-33、明治書院、2019年3月。
- ・山元隆春『文学作品の「精読(close reading)」の方法をどのように学ばせるか?—登場人物の「予想外の行動」を道標として—』、論叢国語教育学、14号、pp.53-72、2018年7月。
- ・山元隆春『喜びを味わう体験を重ねる場としての「文学国語」—文学作品の読み／書きを通して、人生を理解するための方法を身につける—』、日本語学(明治書院)、37巻12号、pp.2-7、2018年11月。
- ・山元隆春『「文学国語」へ:「文学国語」から』、国語科教育、第85号、2019年3月。

#### 2019年度

- ・山元隆春、第3章3『読書教育の諸相①初等・文学』日本読書学会編『読書教育の未来』、pp.188-196、ひつじ書房、2019年7月。
- ・難波博孝・山元隆春・谷栄次 編著広島大学附属東雲小学校・中学校国語科 著、『詩とイメージ—ネーションの教育学』、明治図書、2019年10月。
- ・木寺祐貴・水田遼介・林藤成美・山元隆春(共著)『IBDP「言語A:文学」に関する一考察—学習評価を中心に—』、国語教育研究(広島大学国語教育会)、第60号、pp.10-21、2019年3月。
- ・山元隆春『「文学国語」の授業をどう考えるか』、日本語学(明治書院)、38巻5号、pp.86-95、2019年5月。

- ・山元 隆春 『フ ィ ク シ ョ ン の 深 い 学 び を 促 す 学 習 評 価 : Jennifer Serravallo(2018)Understanding Texts & Readers を手がかりとして』、論叢国語教育学、15 号、pp. 54-67、2019 年 7 月.
  - ・山元隆春『学びを見取り、励まし、「自分のテーマ」の発見をいざなう』、教育科学国語教育(明治図書)、839 号、 pp. 48-51、 2019 年 11 月.
  - ・山元隆春、自立した読者を育てる文学の授業、国語(香川県高等学校教育研究会国語部会)、72 号、pp. 56-87、2020 年 3 月.
- 2020 年度
- ・ジェラルド・ドーソン(山元隆春・中井悠加・吉田新一郎訳)『「読む文化」をハックする』新評論、2021 年 1 月.
  - ・山元隆春『ブレンド型授業における読むことの「選択する学び」と評価 : Gordon (2018) No More Fake Reading を手がかりとして』論叢国語教育学、16 号、 pp. 78-93、 2020 年 7 月.
  - ・山元隆春『「文学の対話的論証(Dialogic Literary Argumentation)」と学習評価—文学の授業における生徒へのフィードバックを中心に—』国語教育研究、62 号、 pp. 1-14、2021 年 3 月.

#### 【文献】

- 寺田守(2012)『読むという行為を推進する力』溪水社
- 八田幸恵(2010)「国語科の目標を設定する—活動とスキル・トレーニングを乗り越えて—」『教育』、60-11、国土社、pp. 70-78
- 浜本純逸監修・赤荻千恵子編著(2016『) 白熱! 「中学読書プロジェクト」』学事出版
- プロジェクト・ワークショップ編(2014)『読書家の時間』新評論
- 間瀬茂夫(2013)「理解方略指導研究」、全国大学国語教育学会編、『国語科教育学研究の成果と展望 II』、学芸図書、 pp. 233-240
- 松友一雄(2013)「読むことの学習に関する評価研究」、全国大学国語教育学会編、『国語科教育学研究の成果と展望 II』、学芸図書、 pp. 241-248
- 松本修(2015)『読みの交流と言語活動』玉川大学出版部
- 山元隆春(1994)「読みの「方略」に関する基礎論の検討」広島大学学校教育学部紀要、第一部、16、 pp. 29-40
- 吉田新一郎(2010)『「読む力」はこうしてつける』新評論

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 山元隆春	4. 巻 15
2. 論文標題 フィクションの深い学びを促す学習評価	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 論叢国語教育学	6. 最初と最後の頁 54、67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/48807	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山元隆春	4. 巻 839
2. 論文標題 学びを見取り、「自分のテーマ」の発見をいざなう	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育科学国語教育	6. 最初と最後の頁 48, 51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山元隆春	4. 巻 14
2. 論文標題 文学作品の「精読（close reading）」の方法をどのように学ばせるか？	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 論叢国語教育学	6. 最初と最後の頁 52-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/47699	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山元隆春	4. 巻 37-12
2. 論文標題 喜びを味わう体験を重ねる場としての「文学国語」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 124-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山元隆春	4. 巻 16
2. 論文標題 フレンド型授業における読むことの「選択する学び」と評価 : Gordon (2018) No More Fake Readingを手がかりとして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 論叢 国語教育学	6. 最初と最後の頁 78 - 93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/50694	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山元隆春
2. 発表標題 フィクションの深い学びを促す学習評価
3. 学会等名 第136回全国大学国語教育学会茨城大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山元隆春
2. 発表標題 読むことの学習指導における「選択する学び」と評価
3. 学会等名 第137回全国大学国語教育学会仙台大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山元隆春
2. 発表標題 「文学国語」へ「文学国語」から 読み/書きの行為を通して、喜びを味わう経験を重ねる場をつくり出す
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山元隆春
2. 発表標題 「対話的文学討議(Dialogic Literary Argumentation)」と学習評価
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第139回秋期大会（オンライン）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 難波博孝、山元隆春、谷栄次、ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 170
3. 書名 詩とイメージの教育学	

1. 著者名 C.A. トムリンソン T.ムーン 山元隆春他訳	4. 発行年 2018年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 248
3. 書名 一人ひとりをいかに評価：学び方・教え方を問い直す	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------